

上 休みの日は都合さえつけば、ヨット部OBの藤田さん、細川さん、息子の慎一さんと後輩の指導にあたる。学生の方況やレースまでの日程を考えながら、練習方法を決定する。

川上親子の挑戦は96年の広島国体から始まった。次の目標は、来夏にノルウェーで開催される世界選手権。本場ヨーロッパでの連覇を狙う。



すべての鍵は「絆」にあり

Kazunori Kawakami

川上一憲

かわかみ かずのり

1971年 香川大学 経済学部卒
牛窓ヨットクラブ会長

日本人初の世界チャンピオン

2014年8月。博多湾を舞台に行われたセーリングのスナイプ級マスターズ世界選手権のグランドマスター部門において、日本人初となる優勝を飾ったのは、川上一憲さん。慎一さん親子ペアでした。かじ取り役のスキッパーを務めた一憲さんは、本学経済学部の第19期生。当時から強豪として知られていたヨット部で主将を務めました。

日本での開催が決まった5年前から目標として定め、3年ほど前から準備を始めたという川上さん親子。海面や波、風向き状況を探るため、事前に博多湾へ練習にも出かけ、別の大会にも出場。大会までは時間単位の綿密なスケジュールを立てたといいます。周到な準備が実を結び、手にした世界タイトル。強風や雨など悪コンディションのなかで結果を出せたのは「チーム力のおかげ」といいます。

「かじ取り役のスキッパーと進路決定を担うクルーは海の上では一心同体。チーム力が高まってくると、1+1が3になるんです」。

風の吹く方向も、潮の流れも、一度たりとも同じ状況はない海の上。瞬時に判断し、言葉を交わさずともお互いがどう動くかを察して操作できたからこそ、栄冠を手にする事ができたといいます。

好きだからこそ長く続けられた

川上さんとヨットとの出会いは中学生のころ。世界で初めて太平洋を単独横断した堀江謙一さんの著書「太平洋ひとりぼっち」を「何度も何度も擦り切れるほど読みました」。自分もヨットに乗りたいたい、その思いを抱き続け、香川大学入学と同時にヨット部へ。大学時代は、3、11月の競技シーズンのうち200日以上は海に出ているといいます。厳しいことも多かったと笑いますが、仲間と一緒にひとつの目標に向

かっていったことは何よりの思い出。合宿させてもらったお寺の住職や食堂のご主人など多くの人が支えてくれたことも忘れられないと話します。

卒業後は、大学時代の仲間とともに国体を目指した川上さん。そのうちに息子の慎一さんも父の影響を受けヨットに乗り始めます。慎一さんの大学卒業後、親子で本格的にレースに出るようになり、それから約20年。

「年を重ねるごとに、続けようかどうしようかと迷ったこともあり。ですが自分は何よりもヨットが好き。だったら残りの人生、好きなことをやろうと開き直って、そこから余計に熱心になりました。息子も一緒に乗ってくれるし、応援してくれる仲間がいますから」。

ヨット部時代の仲間との絆は今も

川上さんは、10年ほど前から香川大学のコーチとして、後輩たちの指導を行っています。取材の日も、同級生の藤田さん、二つ下の後輩にあたる細川さんとともに、泊りがけで指導に訪れていました。学生時代の思い出を話す光景は、まるで家族のよう。

「ほとんど毎日と一緒に過ごしていましたからね。兄弟みたいなもんですよ」と顔を見合わせます。指導は、多い時には月2回程度。救助艇に乗っての指導のほか、ヨットと一緒に乗り込んで、クルーの指導を行うことも。毎年、現役生を自宅に呼んでのバーベキューなど、海の上でも陸上でもありがたい存在です。

「私たちもいろんな人の世話になってやってきましたし、現役と関わることは、私たちの楽しみでもあるんです」と笑う3人。彼らOBによってしっかりと支えられるヨット部の伝統は今も受け継がれています。